



高崎 元宏

コンボイ・アドバイス

最近、胃がんによる死亡率は年々低下してきていますが、いまだにがんによる死亡の大きな部分を占めており、日本では欧米の国々に比べて胃がんの発生・死亡率がずいぶん高いことが知られています。そのため日本では胃がんの早期診断・治療を目的とした胃のエックス線撮影による胃集団検診がかなり以前から普及しており、胃がんによる死亡率の低下のために大きな貢献をしているものと思われまます。すでに新聞やテレビなどでご覧になった方もおられるかもしれませんが、胃のエックス線撮影に加えて、胃がんの早期発見のために大変役立つ血液検査法が開発され話題になっています。

日本人の胃がんは、慢性萎縮(いしゅく)性胃炎という日本人に多いタイプの胃炎をもとに発生してくる高分化型胃がんという胃がんが大部分を占めることが

血液検査で胃がん発見

特徴です。このタイプの胃がんは比較的悪性度が低く、早期に発見できれば適切な治療を行うことで完治する率が非常に高いことが知られています。

また、ごく早期の場合は内視鏡的な胃粘膜切除術(内視鏡を使ってがんを正常な胃粘膜を含めて切り取る治療)の適応となり、手術をする必要もなく完全に治すことができます。高分化型胃がんは、古くから胃炎の程度とその発生の間に因果関係があることが知られていました。従って、その胃炎をなんらかの方法で見つけることができれば、胃がんの早期発見の可能性が広がるわけです。胃炎は、内視鏡検査をすればその診断は簡単で、胃のエックス線撮影でもかなり早期に発見することができます。しかしながら、どちらの検査も受けるためには若干の負

担は覚悟する必要があります。最近、胃炎の程度を採血するだけで簡単に判定できる方法が開発されました。それは、胃の粘膜で作られるペプシノゲンという物質を測定する方法です。実際に、いくつかの施設でこの方法の有効性を判定するための研究がすでに行われており、かなり高い確率で胃炎の正しい診断ができることが分かっています。

また、胃がんの発見率についても、この方法は従来の胃集団検診と比べて遜色(そんしょく)がないという研究報告もみられます。ただし、この方法は、あくまでも直接胃がんを発見するのではなく、胃がん発生のものになる胃炎を見つける方法ですから、胃炎とあまりかかわりのない一部の胃がん(未分化型胃がんなど)が見落とされたり、また偽陰(ぎいん)性(が)んがありながら陰性と判定されること)があるなどの問題もあります。少なくとも、採血によるペプシノゲンの検査は検査を受けるのに負担が全くなく、胃炎の発見のためには大変良い方法であることは間違いありませんので、将来胃集団検診の一部に組み込まれることになるかもしれません。